

関西学院大学名誉教授 細川正義

第26回

一九二〇年代の混沌の中を闘い通した 芥川龍之介
—孤独と寂寥せきりょうの中で求めた〈癒しの空間〉『河童』の世界—

昭和二（一九二七）年七月二四日未明、睡眠薬によつてこの世を去つた芥川龍之介の創作人生は、最後まで懸命に生き抜いた闘いの人生であった。『歯車』『西方の人』をはじめとする作品群はまさにその壮絶な闘いを懸命に生きた軌跡を証するものであろう。その芥川が昭和二年の三月号の雑誌『改造』に発表した『河童』は、晩年の壮絶な闘いの人生と対置して見ればこの作品に託した作者の思いが切実に感じとれよう。

芥川が大正九（一九二〇）年頃からしきりに河童の画を描いたことはよく知られている。その河童の画をかき出したところに親友小穴隆一にあつた書簡に、「この頃河童の画を描いていたら、河童が可愛くなりまして」と書き「短夜の清き川瀬に河童われは人を愛かなしとひた泣きにけり」（大正九・九・二三付）という歌を載せている。この歌をよめば芥川が伝説の生物である河童の不可思議さ、無気味さ、世間から切り離されたイメージの中に、その河童のイメージに共感し、自らの孤独、寂しさ、哀しさといった心情を仮託しようとしていたことがうかがえる。

芥川の河童への関心は亡くなるまで続くが、河童の画を盛んに書いている大正一一年に、『河童』と題した短編がある。これは、これまでの「河童の棲息は認めない」という定説に対して、「河童は水中に棲息する」と言い張つた文章である。芥川が本気で河童の棲息を主張したかは疑わしいが、彼は、自分の分身のように親近感を持つ河童に対して、現代の科学的基準で判断するのではなく、心情において河童は存在しているのだということを強調したかったのであろうと推測できる。

その芥川が今日知られている小説『河童』を書いたのは昭和二年三月

であるが、斎藤茂吉あての書簡（昭和二・三・二八付）に「河童などは

時間さへあれば、まだ何十枚でも書けるつもり」と書いたように、関口安義氏の言葉を借りれば「晩年の芥川作品としては例外といつてもよい伸びやかさがあり、自由に書き飛ばしている」（『芥川龍之介全作品集事典』勉強出版、平成二二・六）印象さえ与えるような生き生きとした筆致で書き上げられているのも、そうした河童の存在への思いの切実さがうかがえるのである。そしてその思いによつて小説『河童』を書いた昭和二年であるが、芥川はその前年の大正一五年四月一日に自殺の意向を小穴隆一に告げたことを小穴は『二つの絵』（中央公論社、昭和三一・一）に書き留めている。解決のつかない精神的苦悩と、それに追い打ちをかけるように生じる身辺の問題、その中で、一切を切り離れた河童との交流の異空間を創作することに没頭している芥川の心情が推測できる。

作品は或る精神病院の患者である「第二十三号」が、上高地の温泉宿から穂高山へ登ろうとして梓川の谷で一匹の河童に出会つて、河童の国に紛れ込んでしまった体験を、精神病院の院長のS博士や「僕」を相手に長々と話したことを「僕」が「可なり正確に写したもの」として、その内容が繰り広げられる形で構成されている。

内容はこうである。河童の国に紛れ込んだ「第二十三号」である僕は、河童の国の法律の定めによつて「特別保護住民」の資格で、医者やチャックの家の隣に住む。僕は河童のことを習い、風俗や習慣にも次第に慣れるようになる。僕の観察した河童の社会は、不思議なところがあり、例えば人間が真面目に思うことをおかしがり、人間がおかしがることを

真面目に思う。また河童の国の出産では、父親が母親の生殖器に口をつけて、「お前は这个世界へ生まれて来るかどうか、よく考えた上で返事をしろ」と大きな声で尋ねる。腹の中の子が、「僕は生まれたくはありませぬ」と返事をする。と産婆が生殖器に硝子の管を突きこんで液体を注射し、腹を縮ませてしまう。このほか河童の国の出来事としてとりあげられるのは、恋愛・家族制度・芸術・自己の才能・官憲の横暴・資本主義・法律・自殺・宗教等の問題である。河童の国で一番勢力のある宗教が「生活教」と称して「旺盛に生きよ」を教えとしていることは印象的である。僕はだんだんこの国にいることも憂鬱になってきたので、人間の国へ帰ることを思い立ち、年をとった河童の手引きで人間の国に戻るが、僕は人間社会に適応できず、河童の国へ戻るため中央線の列車に乗ろうとして巡査につかまり、病院に入れられてしまう。早発性痴呆症との診断であった。最後に、僕の状態を実証するかのように、河童の国からマッグが持つて来た、亡くなった詩人トックの全集の詩を読むといつて「古い電話帳をひろげ」大きな声で読みはじめるところを描いている。現実世界では狂人となった「第二十三号」の僕がこのように河童の国の体験を語り、狂人となったヘップに対して「僕はS博士さえ承知してくれば、見舞いに行つてやりたいのですがね…」で閉じるのである。

河童の国の体験を語る「第二十三号」の回想には、関口氏が指摘するように「伸びやかさ」が感じられる。しかし冒頭で「第二十三号」がS博士やこの作品の語り手となる「僕」に体験を語つたあと、「出て行け！この悪党めが！ 貴様も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、凶々しい、うぬ惚れきつた、惨酷な、虫の善い動物なんだろう。出て行け！ この悪党めが！」と怒鳴りつけているように、狂人としての「第二十三号」も印象付けている。狂人となった「第二十三号」が、しかし河童の国に対しては「僕はS博士さえ承知してくれば、見舞いに行つてやりたい」と言っているところに芥川がこの作品を執筆する意図がうかがえる。それは吉田泰司がこの作品を「作者の痛ましい信仰の告白」と評したことに對して芥川が「あらゆる『河童』批評の中であなたの批評だけ僕を動かし

ました」（昭和二・四・三付）と書き送つたことにも通じるであろう。

関口氏は「それは世界的不安現象の中にあつて闘い、傷ついた魂を理解してくれたことへの感謝のことばでもある」（『芥川龍之介新論』翰林書房、平成二四・五）と捉えている。おそらく吉田に「あなたの批評だけ僕を動かしました」と書き送つた心情には関口氏の指摘のように、これまでの人生の中で「闘い、傷ついた」その苦闘の軌跡を、芥川が最も愛着を抱いてきた河童の国に取り込み、そこでは一定の距離を置いて、第三者的に眺める位置に「僕」を設定して追体験させることで、「僕」に對つて河童の国が苦闘の現実世界に對する癒しの空間となることを求めようとした、その思いを汲み取つてくれた吉田に感謝を示したと解釈できる。

高橋龍夫氏が「河童」の作品構造から、「第二十三号」の話を書く「僕」に着目して「ここには狂人への関心と、狂人の語ることに對する共感が介在していたはずである。」（『病・老い——『河童』における狂気の行方』国文学解釈と鑑賞 別冊、至文堂、平成一六・一）と指摘している。「第二十三号」の河童の国の話に「共感」を抱く語り手「僕」の視点で描かれることで、語り手である「僕」もまた「第二十三号」の癒しの空間に對して仰望をもつていたことも想像できるところである。この語り手の「僕」が作者芥川に近い存在であることは推測に難くないところであり、死を眼前にして孤独と恐怖に苛まれながら苦闘する最晩年の芥川が、癒しの空間としての「河童の世界」を描き、その空間体験を仰望することで、しばしの心の解放と自由を求めていたことが推測できる。

足立直子氏は発狂したヘップに對して「僕はS博士さえ承知してくれば、見舞いに行つてやりたい」と記して終る作品を「つまり、（狂気の男）の物語は、（信じる男）の物語でもあり、その危ういところでの均衡の中にこそ、この作品の魅力がある」（『芥川龍之介 異文化との遭遇』双文社出版、平成五・二）と捉えている。人間味豊かな「第二十三号」の語りゆえに聞き手の「僕」が関心を深くしたともいえる。最晩年の苦闘の中で人間味のある癒しの空間にまつわる「河童」世界を描いたところに、人間芥川の魅力が潜んでいることは見逃してはいけぬ点であろう。